

異世界の平和を守るだけの
簡単なお仕事

セルディ

エリアスルードの副官。
彼とは幼馴染でもある。
面倒見がよく
苦勞性なので、
ツッコミ役に回りがち。

わたなべ 渡辺

透湖のゼミの後輩。
怪我をしてショーに
出られなくなって
しまい、透湖に
代役を頼む。

リースファリド

王宮付き魔法使い。
エリアスルードや
セルディとは幼馴染で、
透湖のことを
調べに来る。

セルヴェスタン

国境警備団の団長。
透湖の後見人となり、
家庭に迎え入れる。
実は王族の一人
らしい。

ミリヤム

団長の一人娘。
器量がいい上に
しっかり者で、
透湖のよき友人
となる。

クラウディア

辺境伯の娘。
エリアスルードが好きで、
彼と結婚したがっている。
透湖のことが気に入らない。

エリアスルード

国境警備団の騎竜隊の隊長。
マゴスと呼ばれる
謎の巨大生物と戦っている。
仕事熱心で真面目な性格。

らこ 透湖

ごく普通の大学生。
ヒーローショーのバイト中、
異世界に飛ばされた。
エリアスルードたち
国境警備団に保護されている。

目次

プロローグ	着ぐるみの救世主	7
第一章	異世界トリップは着ぐるみとともに	17
第二章	異世界チートなのは着ぐるみでした	36
第三章	着ぐるみ、無双する。	78
第四章	招かざるモノ	104
第五章	英雄への道——ただし、叫ぶだけの簡単なお仕事です	151
第六章	「来訪者」	179
第七章	すれ違いだよ、人生は	218
第八章	ピンチからの大逆転	242
エピローグ	それぞれの事情	281

プロローグ 着ぐるみの救世主

およそ六百年ほど前、大陸の北方にミゼルという栄えた国があった。国土の大部分が山という厳しい条件ながら、貴重な魔法石まほうせきが採れることを背景に、魔法大国として名を馳せていた。

魔法石とは魔力や魔法そのものを閉じ込めて利用できる希少な鉱石だ。

それまで魔法といえは修業を積んだ魔法使いだけが行使できるもので、一般の人間には縁がないものだった。ところが、この魔法石の発見と研究によって、石にあらかじめ魔法を仕込んでおけば、魔力を持たない者でも扱えることが明らかになったのだ。

光の魔法を仕込んだ石さえあれば、簡単に明かりを得ることができる。火の魔法を閉じ込めた石があれば、燃料がなくてもいつでも火が使えた。魔法石は貴重で高価なものだったが、砕けさえしなければ何度でも繰り返し使える。

人々はこぞって魔法石を求め、やがて国外へ広まるにつれて、この世界の人間の生活を大きく変えていくこととなった。

産出国であるミゼルの名は大陸中に轟き、弱小国から並ぶものなき強国へと一気に変化を遂げた。

魔法大国と呼ばれ、大陸で一番豊かで栄えていたミゼル。その栄光は長く続くかと思われた。だが、今から六百年前、ミゼルはあつという間に滅んでしまった。——謎の生物マゴスによって、ミゼル国の名は大陸史から消滅し、今となっては旧ミゼル国の一部を併合したファンデロー国の名に名残があるだけだった。

ファンデロー国の最北端にある「ミゼルの砦」。

マゴスによって滅ぼされた国の名を冠する砦は、かの生物との戦いの最前線になっている。人類の存亡をかけた戦いは壮絶さを極め、幾度となく砦が破壊され、街や人々は蹂躪された。だがそのたびに人類は「来訪者」と呼ばれる者たちの力を借りて、マゴスを退けてきたのだ。そして今、五十年に一度といわれるマゴスの襲来期が再び訪れていた。

この物語は、後に「マゴスからこの世界を救った救世主」と称されることになる着ぐるみ姿の女性が、ミゼルの砦近くの街に降り立った時から始まる——

* * *

ファンデロー国の最北端にある城塞都市セノウはにぎやかな街だ。

山間部に位置しながら、これだけ人口が多いのは、貴重な魔法鉱石の取引拠点だからというだけ

ではない。マゴスの侵入を防ぐために作られた北の砦にほど近く、国境警備団の運営本部のお膝元でもあるからだ。

毎日のように砦に向けて人や物資が運ばれ、一方では王都や周辺都市から必要な物資がセノウの街に運び込まれている。物が多く集まると人の出入りが盛んになるのは当然の流れだ。

そのように普段は活気あふれるセノウの街も、マゴスの侵攻が始まったことで、閑散とした時期がある。だが「救世主」の噂を聞いて人々が街に戻り、今ではかつてのにぎわいを取り戻していた。

街の中心にある国境警備団の建物からまっすぐ正門まで続く石畳のストリートには、店や露天商が並び、多くの買い物客でにぎわっている。

そのメインストリートを人々の注目を浴びながら、二人の女性が仲良く連れ立って歩いていた。買い物を楽しんでいる様子で、手提げの籠からは果物らしきものが見え隠れしている。

女性うちの片方は、街の住人の誰もがよく知るミリヤムだ。国境警備団の総団長セルヴェスタ・ロードの一人娘で、金髪碧眼の美少女である。

貴族出身のミリヤムは本来だったら平民には近づくこともできない高嶺の花だが、気さくな性格で男性のみならず女性からも好かれていた。彼女が注目を浴びるのは当然と言える。

だが、人々の視線はミリヤムではなく、その隣を歩くピンク色のワンピースを着た女性に向けられていた。

「な、なんじゃありや？」

久しぶりにセノウを訪れたとある商人は、その女性を目撃し、あんぐりと口を開けた。彼の視線の先をミリヤムと談笑しながら女性が通り過ぎていく。商人は振り返って馴染みの店主に尋ねた。

「店主、店主、ちよつとあれ見てくれ」

「ん？ ありや、透湖ちゃんじゃないか。ミリヤム嬢と仲良く買い物だな。やつぱり若い子はいいいねえ」

初老の店主が二人の後ろ姿を見て微笑んだ。その反応に商人は困惑する。

「い、いや、店主、そうじゃなくて、あれおかしいだろ？」

商人が驚くのも無理はないだろう。その女性の顔は変な被り物ですつぱりと覆われていたのだから。

ゴツゴツした岩のような頭部、黄緑色のギョロツとした目、大きな口から覗く鋭い歯。商人はその造形に見覚えがあった。

「マゴスの幼体そっくりじゃねえか。なんだ、あの悪趣味な被り物は」

「そうか、お前さんは半年ぶりにセノウに来たから知らんのだな」

店主は訳知り顔で頷いた。

「お前さんが半年ぶりにここに来たのも、救世主が現れてマゴスの脅威がなくなったと聞いたからだろう？」

「あ、ああ。『来訪者』が砦を襲うマゴスをかたつぱしからやつつけてくれるから、以前と同じように活気ついていると聞いてな。……まさか」

言いながらあることに気づいて商人は目を見開く。

「まさかあの被り物をした女性が、その『来訪者』……救世主だと？」

「ああ、その通りだとも」

店主はにんまり笑い、得意げに続けた。

「彼女こそ、マゴスの脅威にさらされた我々のもとに、神が遣わしてくださった救世主様さ！ マゴスをバタバタと倒してくれるんだ。砦が襲われるたびに何十人も犠牲を出して、なんとか追いついていたあのマゴスをだぞ。彼女のおかげでこの三か月間、国境警備団の兵士に犠牲者は一人も出しておらん。街に明るさと活気が戻ってきたのも彼女のおかげだ。それまでは葬式ばかりが続いて、街全体が沈んでいたからな。まさに救世主だろう？」

「だ、だが、その救世主がなぜマゴスの被り物なんて……」

「分かってないな。あの被り物が重要なんだよ。大丈夫、中身は可愛らしい普通の女の子さ。人間のな。おっと、聞くより見た方が早いだろう。おーい、透湖ちゃん、ミリヤム嬢！」

店主が声をかけると、女性二人が足を止めて振り向いた。

「あら、ロンジ」

最初に店主に気づいたのはミリヤムだ。遅れて被り物をした女性も気づく。

「こんにちは、ロンジさん」

「二人とも、この商人が都から珍しい品物を持ってきてくれたんだ。見ていってくれ」

「へえ、都からの珍しいものですか？ 透湖、見てみましょうよ」

興味を惹かれた二人がやってくる。

近くで見ると、被り物をした女性はますます怪しく思えた。何しろその被り物が恐ろしく精巧に作られているのだ。だが、店主も周囲の人々も慣れてるようで、二人を微笑ましげに見ている。

「都から来た珍しいものってなんですか、ロンジさん」

マスク越しに聞こえた声は、女性らしい柔らかかな響きだ。普通、被り物をしていたらくぐもって聞こえるはずなのに、彼女の声はとてもクリアだった。

「これだよ、これ。南の方で今しか採れない果物なんだ」

「あら、グリアじゃない」

貴族のミリヤムは珍しい果物の名前をすぐに言い当てる。

「これ、都の王侯貴族にとても人気がある果物なのよ。まさかセノウでも見られるなんて！」

「ミリヤム嬢ちゃんの言う通り、このグリアは都の王侯貴族に人気で、なかなか北部には出回らない代物なんだ。傷みやすいしな。だが、この商人が魔法石に氷の魔力を込めて鮮度を保ったまま運んでくれたんだ」

「……パイナップルに似ているわ」

被り物をした女性がグリアを見ながらポツリと呟く。グリアなのだから似ているも何もないだろうと商人は眉を寄せたが、ミリヤムと店主には女性の言いたいことが分かったらしい。

「ほう、透湖ちゃんの世界にもグリアに似た果物があるのかね？」

「そういえば、食物の体系は似通っているって言っていたわね」

「ええ。こっちの単語に変換されちゃうから伝えられないのがもどかしいけれど、すごくよく似た果物があるの。見た目がそっくりだから、たぶん味も似ていると思うわ」

「それじゃ、確認するために買ってみましょうよ。ロンジ、そのグリアを一つもらうわ」

「そうこなくっちゃ」

店主は破顔すると、グリアを大きな紙で包み始めた。ミリヤムが支払いをしている間、女性は店先の品物を覗いていたが、怪訝そうな商人の視線に気づいて背筋を伸ばした。

「商人さんはセノウに来たのは久しぶりなんですか？ 失礼ですが、私と会うのは初めて……ですよね？」

急に話しかけられて、商人は戸惑いながらもなんとか頷く。女性の丁寧な言葉づかいを聞いて、自分のふしつけない態度をなんとなく恥じていた。

「あ、ああ。そうだ。久しぶりなんだ。……その、じろじろ見ちまってすまないな。どうも、こう、身構えちまって……」

「いえいえ。街の人たちが私の姿にすっかり慣れてくれたこともあって、ちょっと失念してしま

た。びつくりするのは当然だと思えます。でもこんなナリはしていても、ちゃんと人間ですから」
言いながら女性は被り物に両手を添えて、すぽっと上に持ち上げた。

「あ……！」

商人は驚きの声をあげる。被り物の中から、黒髪と黒目をした童顔の女性が現れたからだ。自分たちとは異なる顔だちだが、確かに人間だった。

しかも、思ったよりも子どもだ。そのことに戸惑い、目を何度も瞬かせる商人に、女性はにっこり笑った。

『初めまして、梶原透湖といます』

「へ？」

商人には女性の言葉がまったく分からなかった。

女性は苦笑すると、被り物を元に戻し、顔をすっぱり覆って再び言う。

「私の国の言葉で『初めまして、梶原透湖です』って言ったんです。今もさつきと同じニホンゴをしゃべっているんですけど、ちゃんと通じていると思います。どうですか？」

被り物を通して聞こえてくる言葉は、商人と同じ流暢なファンデロー語だった。

「あ、ああ、大丈夫だ。通じている」

「そう。よかった。つまりですね、このマスクが私の言葉をこっちの言葉に変換し、逆にみんなの言葉も私に分かるように自動翻訳してくれているんです。だから、私はこのマスクを通さないと

こっちの言葉がしゃべれないし、みんなが何を言っているのか分からないですよ。このマスクを常に被っているのは、そういうわけなんです。すぐ変ですよ。自分でも分かっています……でも！ 好きで被っているわけではないので、そこどころよろしくお願いします！」

「あ、ああ」

マスクから元気よく繰り出される言葉に押されて、商人は思わず頷いていた。二人のやりとりを聞いていたミリヤムがくすくす笑う。

「あなたもすぐに慣れるわよ。この街のみんなは今ではすっかり慣れていているもの。セノウだけじゃないわ。近隣の街から透湖を見にわざわざやってくる人もいるのよ」

「そんなに……」

商人が呟く。透湖に向ける目は奇異なものを見るような目ではなくなっていた。代わりに浮かんでいるのは好奇心で、どこか値踏みをするような眼差しだった。

なんとなく嫌な予感を覚えたのか、透湖はミリヤムを促す。

「ミリヤム、そろそろお暇しましょう。まだ買い物途中だし」

「そうですね。じゃあ、私たちそろそろ行くわ。商人さん、それにロンジ」

「おう、寄ってくれてありがとうよ。透湖ちゃん、ミリヤム嬢。グリアを食べたら、ぜひ感想を聞かせてくれ」

「ええ、必ず。またね、ロンジさん」

買ったグリアを手提げの籠かごに入ると、透湖たちは店を後にした。

透湖たちの後ろ姿を見送った店主は、考え事をしている商人に声をかける。

「また何か思いついたようだな、あんた」

長い付き合いのある店主は、商人が品物の売買だけでなく、新しい商品の開発まで手広く行おこなっていることを知っていた。

商人は、目をキラキラさせながら何度も頷うなずく。

「ああ、これはいける。いけるぜ店主。絶対にヒットすること間違いなしだ！」

——この出会いから数か月後、透湖の被っているマスクのレプリカが「救世主のお守り」として発売され、爆発的にヒットすることを、この時の彼女たちは知る由よしもなかった。

第一章 異世界トリップは着ぐるみとともに

ロンジの店を出た透湖は、メインストリートを歩きながらぼやいた。

「救世主とか、恥はずかしすぎる……。そんなたいそうなものじゃないのに」

実はロンジの店を最初に通りかかった時に、彼と商人がしていた話は透湖たちの耳にもしつかりと届いたっていたのだ。

ロンジの声が、本人が思っている以上に大きいせいである。

「あら、救世主なのは本当のことでしょう？」

ミリヤムが悪戯いたづらっぽく笑った。

「ロンジが言っていたように、透湖のおかげで兵士にほとんど犠牲が出なくなったし、街にも活気が戻ってきたんだから。この街にとって透湖は救世主なのよ」

透湖は慌あわてて手を振はって否定した。

「よしてよ、ミリヤムまで。そりゃあ、確かにマゴス相手に無双しているけど、私は何もしていないんだから。全部この着ぐるみをやってるの。チートなのは着ぐるみで、私は添え物！ この怪獣のマスクがなければ、みんなと言葉も交まわせないんだからね」

そうなのだ。ロンジをはじめとしたセノウの街の住人は、マゴスを次々と退治する透湖に感謝してくれるが、彼女はほとんど何もやっていない。

——「口から炎」とか、「目からビーム」とか叫んでいるだけだものね……

これが自分自身の力だったら、褒められてまんざらでもなかったかもしれない。けれど、自分が無力であることを誰よりも知っている透湖にとつて、賞賛されるのは居心地が悪いただけだった。

「でも、その着ぐるみの力は透湖じゃないと発揮されないんだから、やっぱりあなたの手柄だと思わうよ。着ぐるみと透湖はセットなんだし」

「それは……そうだけど……」

「来訪者」が持っているときされる不思議な力が宿っているのも、学ばずして言葉が分かるという恩恵を受けているのも、全部着ぐるみだ。だが、そのチート力が発揮されるのは「中の人」が透湖である時に限られていた。

つまりチートな着ぐるみは透湖が被っていないければ発動しない。だからこそ救世主は透湖である、とミリヤムは言いたいのだろう。

——でも、違うんだよなあ……。虎の威を借る狐……とは少し違うけど、今の私はそれに近い感じだわ。他者の力を借りているだけなのに、「救世主」だなんて。

マスクの下でため息をつき、透湖は空を見上げた。

雲一つない、青く澄み渡った空が頭上に広がっている。

——こうして空だけ見ていると、違う世界にいるだなんて思えないわね。

けれど、透湖の世界にはマゴスなんていないし、魔法も魔法石も存在しない。ここは確かに異世界なのだ。

この国では、世界を渡って落ちてきた者を「来訪者」と呼ぶ。

透湖はその「来訪者」であり、ちょうど三か月前、着ぐるみ姿のままこの世界に落ちてきた。

——違うわ。落ちてきたんじゃないくて、気づいたらこの世界にいたのだけわ。

とある地方大学に通う、普通の学生に過ぎなかった透湖が、なぜ着ぐるみ姿で違う世界に紛れ込んでしまったのか。

これまで何千回も考えたし、今でも毎朝目を覚ますたびに自問するが、答えはいつも同じだ。

「……どう考えても渡辺のせいだよね」

透湖はため息とともに、三か月前のことを思い出していた。

* * *

「もう、本当に申し訳ないっす先輩。俺、一生恩に着ます！」

着ぐるみのマスクを手を取った透湖に、後輩の渡辺哲也が何度繰り返したか分からない台詞を口にする。



「一生なんて大げさね。その足が治ったら焼肉でも奢おごってくればいいわよ」
鷹揚おうちやうに応じてから、透湖は包帯でグルグル巻きにされた渡辺の足をちらりと見る。

その足はギプスで固められ、松葉杖まつはばづえなしには歩けないのだという。

——これじゃ、着ぐるみのバイトを再開できるのはいつになるのかしらね。

しばらくの間、彼がバイトどころか日常生活にも不自由することは確実で、透湖は大いに同情していた。だからこそ、彼の代役として着ぐるみを身に着けて、これから行おこなわれるヒーローショーの悪役として舞台に立つことを承諾しょうたくしたのだ。

透湖が通う大学のある街では、この週末、地域振興フェスティバルが催もよほされていた。

駅前の商店街ではセールが行おこなわれ、街のふれあい広場には特産物を売る露店や食べ物の屋台が立ち並び、住人や近隣の街から訪れる人でにぎわっている。

渡辺が着ぐるみで出る予定だったヒーローショーは、この地域振興フェスティバルの目玉の一つだ。

もともと、出演するのはテレビに出るほど有名なヒーローではなく、いわゆるご当地ヒーローというやつだ。平和を脅おそかす敵から街を守るため、そして街のPRのために日夜戦っている五人のヒーローが主役なのである。

街のイベントには必ず出演して場を盛り上げてくれるので、それなりに人気もあるらしく、昨日の土曜日に行おこなわれたショーには親子連れが多く訪れたらしい。

盛況のうちに一日三回の公演を終え、さらに本日のショーもあと一つを残すところまでは何事もなく順調に進んでいた。

ところが二回目のショーが終わった直後、怪獣の着ぐるみを脱いで休憩に入ろうとした渡辺がアークシデントに見舞われた。大道具の人が階段の踊り場に置いておいた荷物に足を引っかけ、階段から転げ落ちて怪我をしたのだ。

幸いなことに骨は折れておらず、近くの病院ですぐ処置をしてもらい、渡辺は会場に戻ってきた。しかし低予算でやっているためスタッフは最小限しかおらず、代役をこなせる者もいなかった。スーツアクター——いわゆる「中の人」を派遣する会社に連絡して代役を頼むという案も出たが、今から依頼したところで三回目のショーには間に合わない。

みんなが困り果てていたところに、偶然顔を出したのが透湖だった。

可愛い後輩が出演するヒーローショーを見ようと、急に思い立って足を運んだのが運の尽き……と、この日の行動を心底後悔することになるのだが、後の祭りというものだろう。

『あああ、透湖先輩、いいところに来てくれたっす!! 先輩、前にスーツアクターをやったことがあるって言ってましたよね? 一生のお願いです! この着ぐるみを着て舞台に出てほしいんす!』

確かに透湖は以前、数回だけ着ぐるみのバイトをした経験がある。それを渡辺に言ったことも覚えてる。

——でもまさか、こんなことになろうとは。

渡辺にとつて透湖の来訪は、まさに渡りに船だったことだろう。着ぐるみの経験者で、体格も渡辺と似通っているのだから。

『お願いします、透湖先輩! 今日の公演の成否は先輩にかかっているんです!』

『お願いします、哲也の先輩! あなただけが頼りなんです!』

渡辺だけではなく、スタッフ総出で代役を懇願こんがんされては、拒めるはずもなかった。

——まあ、いいか。せつかくショーを見に来た子どもたちを、がっかりさせたくないし。

半ば諦めあきらめの境地となり、ステージの裏側でスタッフの一人と渡辺の手を借りながら支度を開始して——今に至る。

「焼肉っすね! 絶対奢ちかります! なんなら今日でもいいっすよ!」

意気込んで言う渡辺を、透湖は苦笑しながら落ち着かせた。

「怪我した日くらい、安静にしてなさいよ。それより、確か渡辺も一人暮らしよね? その足で生活できるの? 家族に連絡取った方がいいんじゃない?」

とある地方の、一流でも三流でもない、いわゆる中堅と言われる大学に通っている透湖たち。

学年も学部も違う二人の接点は「幻想文学研究室」というゼミだ。研究室と銘打めいってはいるが、要するに自分の好きな小説を読み、感想を言い合ったりしているだけの趣味の集まりである。

透湖は偶然ふらりと立ち寄ったゼミが気に入って、そのまま所属した。そこに一年遅れて入って

きたのが、この渡辺哲也というわけだ。

S F小説が好きだという渡辺と、S Fからミステリー、はてはライトノベルにまで手を出す雑食の透湖。好みは多少違えど、なぜかウマが合い、小説以外のことまでよく話すようになった。

渡辺は明るくて人懐こい性格のため、透湖もつい色々世話を焼いてしまう。ただし……

「生活っすか？ 移動が少し面倒だけど、生きていくのに支障ないっす。わざわざ実家に連絡しなくても大丈夫っすよ」

明るく笑いながら、渡辺は透湖の提案を拒否した。

これだけ気さくなのに、渡辺は決して家族のことを口にしない。そのことに透湖は気づいていた。さつと何か理由があるのだろう。

それに気づけたのは、透湖自身も家族のことを話したくない理由があるからだ。だからこそ、透湖と渡辺は気が合うのかもしれない。

「そろそろ開演時間が近いっすね」

腕時計を確認して渡辺が言った。

「先輩、さつきも言いましたけど、先輩が声を出したりする必要はないっす。録音された音に合わせて先輩がやることは、歩く、暴れる、ヒーローに倒されたふりをして舞台に横たわる、の三つだけっす。ただ、立ち位置は重要っす」

「う、うん。さつき舞台の上で確認しておいたわ。でも、マスク被っちゃうと感覚もずれるからな

あ……」

正直自信がない。

以前にやった着ぐるみは、キャンペーンのために作られた認知度の低いゆるキャラで、チラシを配る人の傍らで手を振ったり、人と握手したりするだけ。演技もほとんど必要なかったのだ。

——やっぱり私には荷が重いんじゃない……

不安に思っていると、渡辺がポケットから何かを取り出した。

「大丈夫っす。先輩にこれ渡しておくっす」

渡辺の手のひらにのっけていたのは、コードのついていないイヤホンだった。

「イヤホン型の受信機っす。これをつけておいてください。舞台の袖から俺が無線で指示しますから」

「ありがとう、そうしてくれると助かる……あっ……」

受け取ろうと手を差し出した透湖は、とある問題に気づく。

「この手じゃイヤホンを耳につけられないじゃん……」

透湖の手は鋭い爪を持つ、ゴツゴツとした岩のような質感の樹脂に覆われていた。少し緑がかったクリーム色という、なんとも形容しがたい色合いだ。

手だけでなく、首から下すべてが樹脂で作られた着ぐるみに覆われている。

「申し訳ないっす。先輩が着ぐるみに入る前に渡しておくべきだったっすね……」

しゅんとした渡辺に、透湖は気にするなと明るく笑う。

「大丈夫、大丈夫。悪いけど、つけてくれる？」

「もちろんっす」

渡辺は松葉杖を動かして透湖に近づき、右耳にイヤホンを取りつけた。

きちんと嵌^{はま}っていないと着ぐるみの中で外れて大変なことになるため、透湖は首を振って確認する。ついでに邪魔にならないように結び上げてある髪と、前髪を押さえてあるヘアバンドがずれたりしないか確認したが、どれも問題ないようだ。

—— 出番はもう少し先だけけど、マスクもつけて慣れておいた方がいいわよね。

透湖は片手に抱えたままだった着ぐるみのマスクに視線を向けた。

ゴツゴツとした皮膚と、黄緑がかかった鋭い目。半開きの口からは尖^{とが}った歯がいくつも覗いている。そう、ご当地ヒーローの今回の敵は怪獣なのだ。

—— 同じ着ぐるみなら、もっと可愛いキャラがよかったなあ。こんなゴツイキャラじゃなくて。

残念ながら透湖が身に着けているのは、ふわふわもこもこではなく、ゴツゴツした皮膚を持つ着ぐるみだ。どっしりとした後ろ脚に比べて前脚は小さめ。恐竜のような背びれがあつて、長くて太い尻尾^{しっぽ}を持つ二足歩行のフォルム。それは某国民的怪獣映画を思わせる造形だった。

その映画に出てくる本物(?)よりデフォルメされているものの、愛らしさのかけらもないためけっこう怖い。

—— ゆるキャラどころじゃないわ。これ、子どもたちが見て泣かないかしら？

急に心配になったが、ヒーローに倒される役ならば恐ろしい方がいいのだろう。

「透湖先輩、そろそろマスク被った方がいいっす」

渡辺に言われて透湖は怪獣のマスクを被る。

怪獣の目は半透明のプラスチックできていて、ところどころ穴が空いていた。そのため、まったく外が見えないわけではないが、やはり視界は悪くなる。それに、口のところから空気が入るようになってはいるものの、自分の吐く息ですぐに蒸し暑くなった。

『透湖先輩、聞こえます？』

右耳に取り付けられたイヤホンから渡辺の声がした。見れば、渡辺が無線の送信機に向かって話しかけている。

大丈夫という意味を込めて頷^{うなず}いてみたが、着ぐるみの頭部があまり動いていない気がしたので、透湖は片手を上げた。なんだか「ハイイ」と挨拶^{あいさつ}しているような感じになってしまったのは、この着ぐるみの肩がまつたく上がらず、肘^{ひじ}から下しか動かせない仕組みになっているからだ。

だが、どうやら渡辺には通じたらしい。

『通信は問題ないみたいっすね。そろそろ舞台上がる時間なので、袖^{そで}に行きましょう、先輩』

舞台ではすでにシヨウが始まっていて、赤、青、黄色、ピンク、黒のコスチュームをそれぞれ身にまとったご当地ヒーローたちが登場していた。

子どもたちの歓声があがる中、ヒーローたちは一人一人挨拶をして決めポーズを披露する。それからバックミュージックが流れてきて、彼らはおもむろに歌い出した。……そう、彼ら専用のテーマソングまで作られているのだ。

この街出身の作曲家と作詞家を作ったとナレーションの女性が説明している。だが、透湖の耳にはほとんど入っていないかった。その目はヒーローたちに釘づけだ。

——ポーズを取りながら歌うなんて、よく恥ずかしがらずにできるなあ。渡辺がヒーロー役じゃなくて本当によかった。あれを覚えるのも演じるのも私には不可能なもの。

五人は舞台を縦横無尽に動き回る。マスク越したと歌詞はよく聞き取れないが、「この街の平和は俺たちが守る」と繰り返しているのはなんと分かった。たぶん、そこがサビなのだろう。ところがヒーローたちが二番のサビを歌い上げたその時、音楽が止まり、舞台の照明が一瞬にして落とされた。ざわめく観客をよそに、謎の高笑いが響き渡り、舞台のスクリーンに人影が映る。どうやら敵の親玉のようだ。

——そういえば、ストーリーを聞きそびれていたわ。

ご当地ヒーローに興味がないため、彼らの基本的な設定すら分かっていない透湖だった。

『ワーハハハ、この街を支配するのは我々だ。祭りで浮かれている人間どもを抹殺してくれようぞ！ 出でよ、宇宙怪獣スペースGよ！』

——もしかして、私はスペースGという名前なの？

それを確認する間もなく、耳元に渡辺の声が響いた。

『先輩、出番す！』

透湖は慌ててステージの中央に向かって歩き出した。

ステージ後方に設置された大きなスクリーンに、ビルが立ち並ぶ街のシルエットが浮かび上がる。同時に恐竜の叫び声のようなものと、ズシンズシンという足音がステージに響き渡った。もちろんこれは音による演出だ。

さらに不穏なBGMが流れる中、透湖演じる着ぐるみ怪獣——もといスペースGがのしのとステージの上を歩いていく。

そろそろ最初の立ち位置のはずだ——そう思った矢先、耳元で渡辺の声がした。

『そこす。先輩、その場で立ち止まってください！』

背景となるスクリーンには、透湖がいるあたりから光線や火が噴き出し、街を破壊している様子が映し出されている。視界の狭い着ぐるみの中からしか周囲を見ることができない透湖には、横で何か光っているということしか分からないが、観客には怪獣の目から光線が出て、口から火を噴いているように見えるだろう。

なるほどと透湖は思った。CGで作られた映像と合わせるために、怪獣の立ち位置が重要だったのかと。

しばらくすると、光線と火が消え、スクリーンには怪獣が大暴れして破壊されたような街のシル

エツトが映し出されていた。

ナレーションの女性の声がステージに響く。

『なんとということでしょう、私たちの街がどんどん破壊されていきます！ このスペースGの暴挙を止められるのは、私たちのヒーロー戦隊サクラマンしかおりません。会場のみなさん、力を合わせて、大きな声で彼らを呼びましょう。せーの、サクラマン！』

ナレーターの声に合わせて、子どもたちと付き添いの保護者が声を出す。

ちなみに桜町のご当地ヒーローなので、彼らの名前も「サクラマン」なのである。

「サクラマン！ 助けに来て——！」

子どもたちの声に応じて舞台の袖から登場したのは、五人のご当地ヒーローたちだ。

「街の平和は俺たちが守る！」

テーマソングの歌詞と同じような台詞を吐きながら、ヒーローたちは怪獣を取り囲み、攻撃を始めた。

『その場で適当に暴れてください、先輩。手を振り回すとか、そんな程度で大丈夫です』

透湖は渡辺の指示のもと、着ぐるみの手をぐるぐる振り回した。

ヒーローたちは透湖演じる怪獣スペースGに向かって殴りかかったり、大げさな動作で蹴りを入れたりする。ところが攻撃が当たる前に、ヒーローたちは弾き飛ばされたように派手にステージ上を転がった。

「くそっ、攻撃が通じない……！」

なるほど、どうやら彼らの攻撃が怪獣にはまったく通用しないという設定らしい。

舞台上慣れて少し余裕が出てきた透湖は、ファイティングポーズを取りながらシュッシュツと殴る動作をする。すると、さすがヒーローの中の人たちは慣れているだけあって、透湖の動きに合わせてタイミングよく倒れてくれた。

——あ、ちょっとこれ楽しいかも。

調子に乗って暴れる透湖の耳元で、渡辺の声がした。

『いっすよ、先輩！ その調子です。でもそろそろ倒される時間っすよ』

どうやら楽しい時間は終わりのようだ。

——悪役は正義のヒーローに倒されなくちゃならないんだものね。

「俺たちは負けられないんだ……！」

赤いコスチュームを着たヒーローがよろよろと立ち上がり、仲間を振り返って叱咤激励する。

「いいか、みんな！ 力を合わせよう！ 合体技だ！」

突然ステージ上に鳴り響くテーマソングに合わせて、ヒーローたちが組体操を始めた。おそらく

「みんなで力を合わせる」を体現した動きなのだろうが、どう見てもただの組体操である。

——あれ、小学生の時にやったなあ……

横に広げた手を繋いで支え合い、扇のような形を作る技だ。見栄えがするわりに簡単そうだが、

やっている方はかなり大変なのだ。透湖は経験から知っていた。

ヒーローたちは扇の技を綺麗に決めると、その姿勢のまま全員で声を合わせた。

「食らえ、必殺、サクラマンビーム!!」

パパパとスポットライトが一斉にヒーローたちを照らし出す。後ろのスクリーンには、光の束のような光線が透湖の方に向かってまっすぐ伸びてくる光景が映し出されていた。

それが怪獣の着ぐるみに重なると同時に、『ギャアアア』という、いかにもやられましたよ的な音がステージに鳴り響く。

ヒーローたちの組体操——もとい、合体技を照らしていたスポットライトが、今度は透湖が演じるスペースGを照らし出した。合体技に撃たれたことを演出しているのだろう。

——そろそろ倒されて終わりか。……それにしても、眩しすぎない？

四方八方から照らす光はかなり強烈で、眩しく感じた透湖は思わず目を閉じた。着ぐるみの中にいる自分が、こんなに眩しく感じるのをおかしい——と思う間もなく。

瞼の裏で光の残像がチカチカと瞬いた。

『先輩、スペースGは倒されました。スポットライトが照らしている間に、ステージの床で横になってください。あとは寝たままでOK……って、先輩?』

渡辺の声が聞こえたが、奇妙なことに、その音はやけに遠かった。

『先輩、どこですか、先輩!?』

焦ったような渡辺の声が最後に聞こえて——不意に消えた。

* * *

「先輩、スペースGは倒されました」

渡辺哲也はステージに視線を向け、無線で透湖に指示を出しながら思っていた。

——なんか、やけにライトが眩しくないつすかね?

ステージは光に埋め尽くされ、怪獣の輪郭がぼやけてはつきりしないほどだ。

「スポットライトが照らしている間に、ステージの床で横になってください。あとは寝たままでOK……って、先輩?」

眩しさのあまり、ほんの一瞬目を逸らした間に、輪郭どころか怪獣そのものがスポットライトの中から消えていた。

すでに横になっているのかと、目を睨めてみても、何もなかった。そう、何も。

「先輩、どこですか、先輩!？」

慌てて呼びかけるも、透湖に渡したイヤホンは受信するだけのものなので、応答はもちろんなかった。

照明係も異変に気づいたのか、スポットライトが消されていく。ようやく光に邪魔されずにス

テージを見られるようになったが、そこに怪獣の姿はない。ステージの下に転げ落ちたのでもなく、忽然と姿を消してしまったのだ。

観客がざわめき始める。ステージの上で合体技を解いたヒーローたちも、困惑気味に透湖のいた場所を見つめている。

誰もが唾然とする中、ナレーションの女性がハッと我に返り、マイクに向かって声を張り上げた。『こ、こうして宇宙怪獣スペースGは消滅し、桜町の平和は守られたのです！ ありがとう、サクラマン！』

このナレーションの言葉で、怪獣が突然消えたのは演出だったのかと観客たちは思ったようだ。拍手が鳴り響く中、渡辺はステージの周囲を見回しながら呟いた。

「先輩、一体着ぐるみのままどこへ行っちゃったんですか？」

* * *

——同じ頃。

見知らぬ街の石畳の上で、着ぐるみを身に着けたままの透湖が叫んでいた。

「ちよっと、ここはどこなの!? つい今しがたまでステージにいたはずなのに！」

眩しさのあまり目を閉じて、次に開けてみたら違う場所にいたのだ。

——こんなところ、フェスティバルの会場にあったっけ？

着ぐるみを着たまま、ステージから異なる世界に迷い込んでいたことに、この時の透湖はまだ気づいていなかった。

第二章 異世界チートなのは着ぐるみでした

城塞都市セノウにある国境警備団の総本部の一室。そこにその一報が届いたのは、エリアスルド・アージェスとセルディ・ハイネマンが書類仕事と格闘している時だった。

「突然申し訳ありません、アージェス隊長、ハイネマン副隊長！」

ノックもなしに部屋に飛び込んだのは、街の警備を担当している第五小隊の隊長だ。

「カーナディじゃないか。どうした？」

書類から顔を上げてセルディが促すと、廊下を走ってきたのか汗だくになっているカーナディ第五小隊長は息を整えながら答えた。

「巡回中の部下から連絡が入りまして。新市街に、マゴスの幼体らしきものが現れたそうです！」

「マゴスの幼体だ?!」

思わずといったふうに椅子から立ち上がったのはエリアスルドだ。

「はい。未確認ですが、別の市民からも目撃情報が寄せられております。ひとまず兵を出しましたが、もし本当にマゴスの幼体であれば、我々だけでは対処できません」

「すぐに現場に行く」

短く答えると、エリアスルドは椅子の近くに立てかけてある剣を手にとった。その剣を腰に差しながら矢継ぎ早に指示を出す。

「本当にマゴスの幼体なら、近くに親がいるはずだ。今は姿が見えなくとも、すぐにやってくるだろう。近隣の住民をただちに避難させるんだ。それと警備兵たちに伝えてくれ。マゴスの幼体を見かけても、俺が到着するまで決して手出しをしないようにと。幼体とはいえ、何をするか分からないからな」

「はい。承知しました。すぐそのように致します」

カーナディ小隊長は真剣な表情で頷いた。

彼は軍人らしい厳つい容姿をしている。一方のエリアスルドはすらりと背が高く、明るい金髪に青緑の瞳を持つ端正な顔だちの青年だった。

そこだけ見ると、たたき上げの中年軍人と、身分のおかげで高い地位にいる青年将校といった感じだ。だが、カーナディ小隊長のエリアスルドを見る目は、尊敬と憧れが入り混じったものだ。ただ、

それも当然だろう。一見、貴族的で育ちの良さを窺わせる容貌のエリアスルドは、若くしてファンデロー国軍の精鋭中の精鋭、騎竜隊を預かる実力者なのだから。彼が戦うところを一度でも目にしたことがあれば——いや、そうでなくともこのセノウの街でエリアスルドの実力を疑う者はいない。

砦がマゴスに襲われるたびに騎竜隊を率いて応援に駆けつけ、死闘を繰り広げて街に戻ってくる。エリアスルドと騎竜隊のおかげでこの街が無事であることを、子どもでも知っているのだから。それどころか、エリアスルドの実力は諸外国にまで知られていた。

——「マゴス・スレイヤー（マゴスを狩る者）」。
まだ軍に入ったばかりの頃、偶然マゴスに遭遇し、たった一人で討伐を果たしたことから呼ばれている。

エリアスルドの名前は知らなくとも、「マゴス・スレイヤー」あるいは縮めて「マゴスレイヤー」の称号を知らない者は一人もないだろう。

マゴスを狩るのは英雄である彼の使命なのだ。

「セルデイ、あとは頼む」

騎竜隊の副隊長で、自分の右腕でもあるセルデイに一言告げて、エリアスルドは部屋を飛び出そうとする。それを止めたのは、他ならぬセルデイだった。

「まあ、待て、エリアスルド。お前が行く必要はない。新市街へは俺が行く」

セルデイは剣を手に立ち上がった。エリアスルドは目を丸くする。

「セルデイ？」

「お前がいけない間にマゴスが砦を襲ってきたらどうする。お前はここに残って、俺が新市街に行くのが一番いい。それに、目撃されたマゴスの幼体は本物かどうか怪しいんだろ？」

それに答えたのはカーナデイ小隊長だ。

「はい。まだ確認が取れているわけではありません」

「砦に詰めている兵ならともかく、市民も警備兵もマゴスの幼体を実際に見たことはないはずだ。

他のものをマゴスと見間違えたんじゃないか？ それが何かは分かんが、マゴスじゃないと思う。なぜなら、騎竜たちが騒いでいないからだ」

窓の外を指さしながらセルデイは言う。エリアスルドが窓の外を見ると、旧市街を囲む城壁の屋根で羽を休めている翼竜たちがいた。うずくまって寝るなど、くつろいだ様子を見せている。

セルデイの言葉にエリアスルドは頷く。

「いつも通りだな。確かに、マゴスがセノウの近くに——それも新市街にいたら、翼竜たちはとっくに騒いで俺たちに知らせているだろう」

「だろ？ だから新市街のマゴスの幼体は、何かの間違いじゃないかと思うんだ。大方、マゴスの姿絵を遠目に見て勘違いした者がいたんだろう。まあ、まだ確認したわけじゃないが。とにかく、何かあった時のために、お前はここで待機してくれ。新市街へは俺が確認しに行く」

「お前が行くのは構わないが……」

いそいそと支度するセルデイを、エリアスルドは胡乱げな目で見た。

「書類仕事に飽きて、俺に押しつけようとしているわけじゃないんだよね？」

「べ、別に、そういうわけじゃないぜ」

言いながらもセルデイの目が泳いでいる。どうやら凶星だったようだ。

エリアスルードは軽いため息をついた。自分とセルデイは上官と部下という立場だが、幼馴染として育ち、軍でも一緒にいるせいとか、互いの気質を知り尽くしている。

セルデイはなんでも器用にこなすし、頼れる部下ではあるが、書類仕事だけは苦手なのだ。身体を動かしている方がよっぽどいいらしい。

きつと、今回も書類仕事が嫌で、自分が代わりに行くと言いついたのだろう。何かあった時のため……というのは建前で。

だが、彼の言葉は一理ある。最近になってマゴスの襲来が頻発しているのだから、いざという時のためにエリアスルードが総本部にいた方が合理的なのだ。

エリアスルードはしぶしぶ剣をベルトから鞘ごと引き抜き、セルデイに告げた。

「分かった。行ってこい。……だけど、本物のマゴスの幼体だという可能性も否定できない。くれぐれも注意してくれ」

「了解。何年お前の下でマゴスと渡り合ってきたと思っっているんだ。マゴスの恐ろしさや強さは身に染みてる。何かあったら魔法ですぐに知らせるよ。じゃ、カーナデイ小隊長。マゴスの幼体とやらが目撃された場所を教えてください」

直接案内するというカーナデイ小隊長を連れて、セルデイは執務室を出ていった。

一人になったエリアスルードは、小さくため息をついて窓の外を見つめる。そこから見える街の

風景はいつもと変わらなかった。

「……マゴスの幼体……か」

そう呟く彼に、セルデイが向かった先でセノウの街の——いや、国の運命すらも変える出会いが待っているとは、知る由もなかった。

* * *

透湖の目の前には、石畳の道と、漆喰の壁の家がずらりと並んでいた。

「ここ、イベント会場のどこなんだろう？」

キョロキョロと辺りを見回しながら呟く。まったく覚えのない場所だ。さっきまでイヤホンから聞こえていた渡辺の声も、今は全然聞こえない。

——確か、シヨウの途中で光が眩しくなって目を閉じたはず。それが目を開けてみたらこんな場所にいるなんて、一体どうして？

不思議に思ったが、この時点で透湖の頭の中に、ここが自分の住んでいた世界とは違う場所だという考えは浮かんでいなかった。

なぜなら、見知らぬ場所ではあるものの、写真やテレビ、それにインターネットで似たような場所を見たことがあったからだ。

——中世ヨーロッパの面影を残す……えっと、確かドイツにある有名な観光地。あれとそっくりだわ。

石が敷き詰められて少しでこぼこした道も、ずらりと立ち並ぶ漆喰で塗られた壁も、統一感のある茶色の屋根も、ガイドブックに載っていた写真ととてもよく似ている。

だからこそ透湖はここをイベント会場の中だと勘違いしたのだ。中世の街の一部を再現したコーナーか何かだと思っていた。

「とにかく、このコーナーを抜けるか、人を探してヒーローショーの舞台の場所を聞かないと」

今透湖が立っている通路は、どうやら本物らしく再現された路地のような道。道幅は狭く、人が三人並んで通れるか通れないかくらい。人通りもまったくなく、しんと静まり返っていた。

——まるでゴーストタウンみたい。人気がなくて人が入ってこないのかしら？

あくまで透湖はここをイベント会場の中だと信じ、疑いもしなかった。

——ま、いいわ。とにかく路地をこのまま進めば大通りに出られるかもしれない。大通りに出れば、さすがに人もいるはず……

そう思い、歩き始めようとした時だった。頭上でバタンとガラス窓が閉まる——あるいは開いたような音が聞こえた。ハツとして顔を上げるけれど、路地に面した家のガラス窓はすべて閉まっていて、どこから音がしたかは分からなかった。

——気のせいかな？

首を傾げながら、透湖は顔を前に戻して歩き始める。

石畳の道を着ぐるみ姿で進む透湖は知らなかった。二階の窓から偶然透湖の姿を見つけた住人が慌てて反対側の出入り口から飛び出し、警備兵の屯所へ駆け込んだことを。屯所から「マゴスの幼体らしきものが街中まちなかにいる」との連絡を受けたカーナディ小隊長がセルディたちのところへ向かったことも、当然知る由よももない。

「広い通りに出たのはいいけど……」

狭い路地を抜けて、先ほどより幅の広い通りに出た透湖は困惑していた。そこにも誰もいなかったのだ。

通りには看板のついた店らしき建物が軒のきを連ねていたが、透湖に見える範囲内で営業している店は皆無だ。扉は施錠され、明かり一つ灯っていない。

「人の姿も見えないし……」

——これじゃ本当にゴーストタウンみたいじゃない。本当にここ、フェスティバル会場の中なのかな？ もし、違っていたら……

不安が押し寄せてきて、思わずぶるぶると背筋を震わせた時だった。透湖から十メートルほど離れた店の扉から、買い物籠かごを手にした人が出てくる。ちよつと古めかしい、くるぶしまである灰色のワンピースにエプロンをつけた、まだ若そうな女性だ。

——このコーナーのスタッフさんかな？

街並みに合わせて中世ヨーロッパ風の服装をしているのだろう。そう解釈した透湖は、パタパタと走り寄りながら声をかけた。

「すみませーん、ヒーローショーの会場って、どっち——」

その声に振り返った女性は、透湖の姿を認めたとたん、ぎよつと目を剥く。そして、恐怖に満ちた表情を浮かべた。

「え？ あの……？」

「キャアアア！」

「あつ、ちよつと！」

女性は悲鳴をあげて、透湖が来たのとは反対方向に向かって走り始めた。それも普通の走り方ではなく、まるで逃げるかのように。

瞬く間に女性の姿は見えなくなった。後に残ったのは、地面に転がっている手提げの籠だけ。それは女性が透湖の姿に驚いて地面に落としたものだった。

「一体、なんなの……？」

嘩然とした透湖は、引き止めようと手を上げかけた姿勢のまま固まっていた。だが、視界の端にその手が入ったことで、今の自分の姿にようやく気づく。

「あ、もしかして、着ぐるみ姿だったから、驚かせちゃった？」

当然と言えば当然だろう。怪獣の着ぐるみに突然声をかけられれば、誰だって驚くに決まって

いる。

——でも、驚くのは分かるけど、血相を変えて逃げ出すほどかしら？

ゆるキャラが流行って以来、祭典や催しなどに着ぐるみが登場することは多い。着ぐるみを見て人が寄ってくることはあっても、あんなふうに逃げられることなんてあるだろうか。まだ幼い子どもならともかく。

まして今回のフェスティバルではヒーローショーがあると告知されていて、この怪獣はポスターにも登場しているのだから、スタッフの人が知らないというのも変な話だ。

——……本当にはフェスティバルの会場なの？

透湖の背筋に冷たいものが走る。

考えてみれば、フェスティバルの会場には舞台の他に屋台なども立ち並んでいて、これほど大掛かりなセットを組む余地はなかったはずだ。そもそも中世ヨーロッパの街並みを再現したコーナーなんてあっただろうか？

——ポスターはチラ見したただけだから、定かじゃないけど、そんなのなかった気がする……

「……だったら、ここはどこ？ 本当にヨーロッパに来ちゃったか、それとも中世ヨーロッパ風の異世界にでも紛れ込んだわけ？ ライトノベルみたいに？」

まさかね。などと思いつつ独り言を呟く。読書に関して雑食の透湖はライトノベルにも手を出しているので、ついそんなことが頭に浮かんでしまう。

——異世界にトリップ、あるいは転生した主人公が、神様から授かったチートで無双する。そんな作品を何作も読んだけど、それを自分が体験するなんてありえないわよね？

「まさか、そんなこと起こりっこないか」

自分の想像を笑い飛ばすと、透湖はまた歩き始める。ところが歩けども歩けども、人の姿は見当たらない。

——けっこう歩いたわよね？　もしここが本当にフェスティバルの会場だったら、とつくに抜け出しているはず。つまり、ここは私のいた街じゃなくて……

「あ、もしかして私、夢を見ているのかも？」

唐突にそんな考えが浮かんで、透湖は納得した。異世界トリップしたのだと考えるより、よっぽど現実的だったからだ。

——そっか、これは夢なんだ。きつと舞台上で光に目がくらんで気絶しちゃったんだわ。でなければ、こんなところにいる説明がつかないもの。

着ぐるみを着ているので頬をつねることはできないが、きつと何か衝撃があれば目を覚ますはず。透湖は石畳の床をじつと見下ろした。

——着ぐるみを着ているとはいえ、ここに倒れ込めば少なからず衝撃はあるはず。一度転ぶと起き上がるのがすごく大変なのは知っているけど、これで目を覚ますことができるなら……

「よし、やるぞ！」

覚悟を決めて、正義の味方に討伐された怪獣のように倒れ込もうとした——その時だった。

石畳の道の上を、何人も人間が走っているような音が聞こえた。その足音はこちらに近づいてきている。

——あ、なんだ。人いるんじゃない。

そう安心したのもつかの間、ガチャガチャと金属がぶつかるような音まで聞こえてくることに気づいて、透湖は嫌な予感を覚えた。

——これってドラマやアニメでよくある、甲冑かちゅうとか着て剣を持っている人たちが立てる音じゃない？

嫌な予感ほど当たるものだ。通りの向こうから足音の主たちが近づいてくる。その姿を目にした透湖は顔を引きつらせた。

それは武装した兵士たちだった。甲冑かちゅうあるいは鎖帷子くさりかたびらのようなものを身に着けて、剣や槍やりを手にしている。

——こ、これも夢かな？　いや、それよりも、あの人たちの標的って私だよな？

残念ながら、ここには透湖しかない。彼らの目的が自分であることは明らかだ。

——どうしよう、逃げるべき？

今来た道を引き返そうとして、後ろを振り返った透湖はぎよつとする。兵士は前方だけでなく、いつの間にか後ろにもいたのだ。音は前からしかしなかったので、もしかしたら悟られないよう足

音を忍ばせて近づいたのかも知れない。

焦っているうちに囲まれてしまい、透湖は逃げるに逃げられなくなった。

——あの兵士さんたちが持つてる剣って本物かな？　これが夢ならいいけど、もし夢じゃないなら私、大ピンチ？

兵士たちは透湖を遠巻きにしている、なぜか手の届くところには近づいてこないが、体格がよく武装した男たちに囲まれている状況には変わりない。

どこかに隙でもあれば、走って逃げられるかもしれない——そんなことを考えながら素早く視線を巡らせると、その先にいる兵士たちが怯むのが分かった。

——あれ？　なんか、兵士さんたちの私を見る目が……怯がっているような……？

気のせいだろうか。けれど、透湖に視線を向けられた兵士たちが後ろに下がる。やはり怯えていると見ていいだろう。

——この着ぐるみのせいかな？

そうとしか考えられない。けれど、全員が怯がっているわけではないようで、透湖の動きを冷静に観察している者もいた。

兵士たちをかき分けて前に出てきた青年も、そのうちの一人だ。

「おいおい、セノウの街を守る警備兵がそんな弱腰じゃ困るな。砦とりでにいる仲間たちはこの街を守るために命がけで戦っているというのに」

「ハイネマン副隊長」

兵士たちが彼を見てホッとしたような表情を浮かべる。青年はまだ若く、二十代初めか半ばのように見えた。背が高く、髪は茶色だ。引き締まった身体の持ち主で、端整というよりは精悍せいけんな顔だちをしている。周囲の兵士たちの方が明らかに年上で、特に青年の斜め後ろにいる男性は中年——もしくは初老と言った方がいいような風貌ふうぼうだ。

にもかかわらず、青年が他の兵士とは一線を画する存在だということが、一目で分かった。周りの兵士たちとは服装も装備も明らかに違っていたからだ。他の兵士たちはみな同じような武装をしているが、青年だけはずっと上等な服を着ており、武器も異なっている。

透湖にはピンときた。

——この人が指揮官に違いない。

実際は斜め後ろに控えている中年の男性が指揮官で、青年はより上級の位くらゐにつく将校なのだが、そんなことが透湖に分かるはずもない。分かるのは、ここにいる兵士の中で一番偉い人間であろうということだけで、その認識に間違いはなかった。

「怖がる必要はない。マゴスの幼体うごがっぽく見えるが、たぶん違う」

油断なく透湖の様子を窺うかがいながら、青年は腰に差した剣を抜く。銀色に輝く剣は、模造刀には見えなかった。

——アレで斬られたら私、死ぬかな。それとも衝撃で夢から覚めるか、二元の世界に戻れる？　そ

の可能性も否定できないけど、それに賭ける気はないわよ！

透湖は慌てて口を開いた。

「ま、待って！ 怪しい者じゃないから！ ……いや、我ながら怪しいのは確かだけど、無害、無害だから！」

そう言った瞬間、兵士たちの間にざわめきが走る。

「しゃべった!？」

「人間の言葉を話したぞ!？」

目の前の青年が眉を上げた。

「マゴスに似ていて、人間の言葉を話せる生き物なんて聞いたこともねえな。言葉が話せるなら意思の疎通はできるんだろう」

言いながらも、青年が透湖に対する警戒を解くことはなかった。

——マゴスってなんだろう？ さつきも同じこと言ってたわよね？

よく分からないが、とにかくその「マゴス」とやらに似ているせいで怪しまれているようだ。

——よし、ここは着ぐるみを脱いで、無害でか弱い女性なのだと証明しないと！

透湖はマスクに手をかけると、よいしょと顔から引き抜いた。これで人間だということが彼らにも分かるだろう。

着ぐるみの頭部を脱いだ透湖の姿に、再び兵士たちがざわめく。けれど、先ほどとは違い、どこ

か安堵あんどしたような表情になった。青年もホツとしたように力を抜き、剣さを鞘さやに収める。

——よし、イケる！

こちらの話を聞いてくれそうだと思つた透湖は意気込むあまり、先ほどまで日本語で話していた兵士たちの口から零こぼれる言葉が、明らかに変わっていることに気づけなかった。

青年に一步近づきながら、透湖は話しかける。

「あの、聞きたいことがあるんです！ ここはどこですか？ 日本ですか？ それともヨーロッパのどこかの国ですか？」

だが、答えは返ってこない。それどころか、さつきまでは平静だった青年が、怪訝けげんそうに眉を寄せて透湖を見ている。

——もしかして日本やヨーロッパという言葉に聞き覚えがない？ やっぱりここは異世界なの？ 周囲の反応からそう解釈した透湖だったが、事態はもつと深刻だった。

「……?」

青年の口から出てきた言葉は、まったく知らない言葉だった。日本語でも英語でも、ましてフランス語やドイツ語でもない。今まで聞いたことのない音と響きだ。

「え？ え？ え？」

透湖は困惑した。

——さつきまでこの人、流暢りゅうちやうな日本語を話していたのに……

そこまで考えてハツとする。もしかしたら、さっきの怪訝けげんそうな反応は、向こうも透湖の言葉が分からなかったせいだろうか？

——つい今しがたまで日本語が通じていたし、向こうの言ってることも理解できていたのに、どうして急に分からなくなったの……？

「ん……？」

唐突にひらめく。先ほどまでとは異なる点が一つだけあるではないか。

「まさか……」

ごくりと息を呑み、透湖は両手で抱えている着ぐるみの頭部を見下ろした。

——もしかして、この着ぐるみを被っていないと、言葉が通じないの!?

* * *

一方、セルディも困惑していた。

マゴスの幼体が街中まちなかにしていると聞いて、兵士たちとともに駆けつけてみたら、それは本物ではなかった。どうやらマゴスの幼体とよく似た被り物をした人間らしい。その頭を脱いで中から出てきたのは、まだ幼さを残す黒髪の少女だった。

——なんて人騒がせな。

安堵あんどしながらも、一言注意しなければと考えたセルディは、剣を収めて少女に声をかけようとした。その時、少女の口から零こぼれたのは、まったく知らない言語だった。

「××、××××××××××！」

「——は？」

セルディが驚くのも無理はないだろう。先ほどまで完璧な発音のファンデロー語を話していたのに、突然おかしな言葉をしゃべったのだから。周囲の警備兵たちも面食らったように少女を見ている。

「おいお嬢ちゃん。あんた一体、何を言ってるんだ？ 俺たちにも分かる言葉で話してくれ。さっきまで、ファンデロー語を話していたじゃないか」

声をかけると、少女はぎよつとしたようにセルディを見つめた。その表情から、こちらの言葉も通じていないことが見て取れる。

「ハイネマン副隊長……あの子は何を言っているんでしょうか？ さっきまではミゼル弁を話していたのに」

後ろに控えていたカーナディ小隊長が嘩然くわぜんとしたように呟つぶやく。その声を拾ったセルディは思わず振り返った。

「ミゼル弁？ いや、あの子は訛なまりのないファンデロー語を話していたぞ？」

ミゼル弁とはセノウの街を含めた北方で使われている方言だ。ファンデロー語と同じ流れを汲む